

所 報

No. 21

佐賀県立教育研究所

佐賀市松原一丁目1-1

(TEL 0952-24-4250)

も く じ

- 佐賀県教育センターへの期待 (佐賀県教育長 古藤 浩) 1~2
- 佐賀県教育センター発足に寄せて (教育研究所 所長 杠 茂) 2
- 佐賀県教育センターの組織・機構 3
- 佐賀県教育センターの事業概要 3~5
- 佐賀県教育センターの位置・構造 5~7
- 昭和53年度 研究紹介 8~10

佐賀県教育センターへの期待

佐賀県教育長 古藤 浩



養護学校教育の義務化・大学入試共通一次の実施など、とかく注目されている今年教育界において、佐賀県ではもうひとつの新しい重要な事業がスタートします。教職員の人づくりの場として長い間待望されていた教育センターの開所であります。

建築学界の泰斗村野藤吾先生的设计によって、佐賀郡大和町に52年6月着工された教育センターは、県職員研修所を含めて建築延面積約6,000㎡、約20億円を投じて、54年3月30日に見事に落成し、4月から業務を開始することになりました。顧みれば、今から6年前、計画の第一歩を踏み出して以来、用地提供者の方々を初め関係者多数の御協力をいただき、ようやく完成の運びになりましたことにつきまして、心から感謝を申し上げます。

今日、高等学校への進学率は94%をこえ、小中・高等学校の施設設備も進み、教育の普及はめざましいものがありますが、反面、児童・生徒の学力低下や非行、登校拒否、自殺など憂慮すべき問題が増加して、県民の深い関心を集めております。

このような現象は、家庭、学校、社会環境とそれぞれ複雑な原因が重なり合っているものと思われますが、学校についてみれば、学校は本来、児童・生徒の人間形成の場であるとともに楽しい所でもあるはずで、古くから「よく学び、よく遊ぶ子供がよく育つ」といいますが、今日の学校で

は、教え込み、学びとらせる厳しさと、ややもすれば、ゆとりと人間的なあたたかみのある、いわば、教師と子供の心のふれ合いがうすれつつあるのではないのでしょうか。「教育は人なり」といわれるように、子供に最も影響を与えるのは教師であり、教師の教師としての日頃の自覚と情熱が、知・徳・体の基礎をしっかりと身につけた人間を作り上げるものと思います。

過日、某新聞が行った佐賀市の小学生のアンケート調査で、子供が困った時の相談相手として、教師をあげた者は一人もいなかったという報道は教育関係者といたしまして見逃し得ないものであります。教師が児童・生徒や父兄の相談相手となり、信頼されて初めて教育という仕事が成り立つといえます。

教育という仕事は、児童・生徒をはぐくむ教育内容についての高度な知識と専門的な技術の両者を兼ね備えた教師によって営まれて初めて期待されるものですから、ここに教師が常によりよい教師に成長するための研修が必要であり、また、研修はそうした教師の資質の向上をめざすものであります。

このたびの研修、研究、教育相談、教育資料の充実の四つの業務を合わせ持つ教育センターの開所は、今日の教育界の渴望の場として、また、佐賀県教育の一層の振興を図るため極めて意義深く教職員の積極的な研修参加のみならず、関係者の方々の御利用を心から期待するものであります。

佐賀県教育センター発足に寄せて

佐賀県立教育研究所 所長 杠 茂

佐賀県教育センターは、葉がくれの里を一望できる景勝の地、大和町に、大平山の深い緑に包まれた白亜の研修殿堂として、教育関係者の期待の中に4月1日から開所されることになりました。

現在の教育研究所も新しい教育センターも、地教行法第30条に基づく教育機関ですから、基本的な性格は同じですが、今日までの教育研究所では、どちらかと言えば、研修事業よりも調査研究に関する事業を前面に位置づけてきました。

教育センターでは、教職が公共性と高度の専門性を要求されるものであることを重視して、これらをもめるために、先生方に自らの義務として、研修に専念できる機会と場を与え、これがより良い刺激になることを願って研修計画等の準備を進めています。

研修事業の中心となるのは、2～8日間の短期研修講座で、これは、国語、算数等の教科及び道徳、特別活動、教育工学等の17分野、60講座延べ208日、受講人員1,914名(延べ6,572名)を予定しています。このほか、長期研修や研修援助についても徐々に事業を進めることにしています。

特色は、教育機器システム、語学演習システムをはじめ、各種の教材教具、演習室、研修室等充実した施設設備を駆使した研修ができることと、宿泊による落ちついた静かな環境の中で、同僚やセンター職員と共に、研修に専念できることでしょう。

研究事業では、「基礎学力の向上」「豊かな人間性と実践力の育成」「社会生活への適応」という三つの共通テーマの下に14本の研究テーマごとに、研究と実践の両面から、小・中・高等学校の研究協力校や、研究委員の所属校で、調査や研究授業等で仮説の検証を行います。またこれらの研究結果を、研究紀要や指導資料にまとめるだけでなく、これを教材化して研修講座に提供しますの

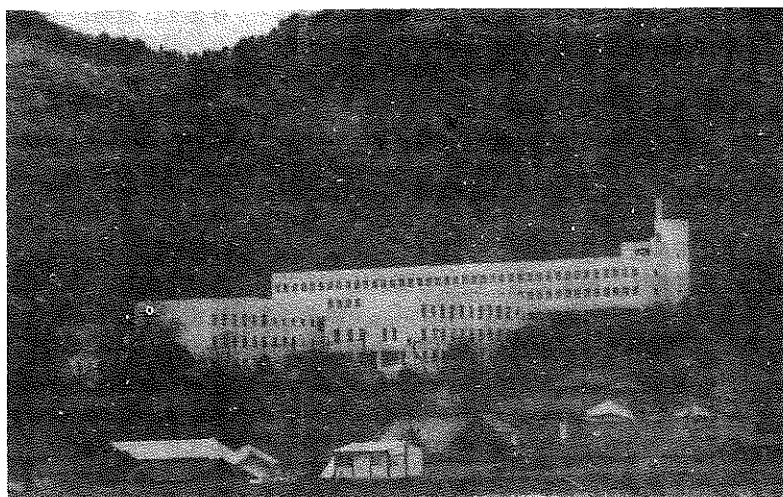
で、先生方自らがセンターでの研修を通して自分の課題を解決され、あるいは深められることを期待しています。

また先生方が、日ごろ個人またはグループとして行っている教育研究の成果を公募し、すぐれた論文については、これを一般に発表して本県教育研究の遺産とし、併せて研究水準を高めたいと考えています。

教育相談では、研究、研修事業の一環として、生活行動上に問題をもつ児童・生徒に対するカウンセリングなど、心理的療法による継続相談を今後も実施しますが、心身に障害をもつ児童、生徒の療育及び指導についても、保護者や学校からの相談に応じ、新しく整備された治療関係の設備や教材教具を利用して、養護・訓練等を行います。

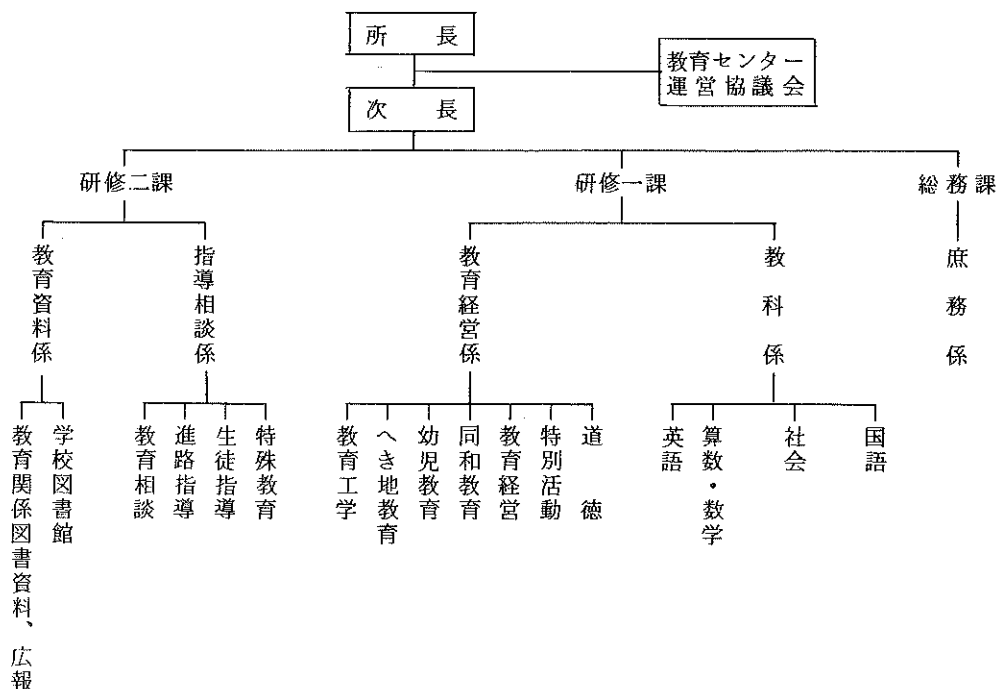
以上のほか、これからの教育センターは、教育指導に関する情報資料センター的な機能と役割を果たす必要があると考え、教育に関する専門図書、研究紀要、調査資料の他、各種の教材や指導資料等を収集整理して、情報を提供し、気軽に先生方に活用してもらうようにしていきたいと考えています。

さて、いよいよ教育センターの開設を目前に控えまして所員一同、「自ら学び、実践できる者のみが、よく教え導くことができる」ということばをかみ締めながら、先生方を、より良い環境と魅力ある内容でお迎えできるよう日夜準備に努力しているところです。



佐賀県教育センター

佐賀県教育センターの組織機構



佐賀県教育センターの事業概要

研修事業

(1) 短期研修

① 基本的な考え方

ア 本県教育の実状を考慮して、効果的な講座を計画する。

イ 調査研究の成果や教育情報等を活用して、研修内容、方法に一層の充実と改善を図る。

② 具体的方針

ア 講座受講定員

校種別	受講定員
幼稚園	90人
小学校	879人
中学校	545人
高等学校	390人
合計	1,904人

イ 講座数

校種別	幼稚園	小学校	中学校	中学校	中高	高等学校	小中高	特殊	計
講座数	3	22	4	14	4	9	3	1	60

ウ 各講座の期間

3日又は4日を標準とする。

エ 講座の種類

昭和54年度の講座は、教職経験者研修各教科（国語、社会、算数・数学及び英語）道徳、特別活動（教科外活動）、学校経営、学級経営、幼児教育、へき地教育、教育工学、教育評価、特殊教育、生徒指導、進路指導、教育相談及び学校図書館について行う。

(2) 長期研修

昭和54年度は高等学校の数学、英語各1名、期間は1年とする。

(3) 研修援助

① 基本的な考え方

教職員の教育に関する自主的研究に対して、積極的な助言及び援助を行う。

② 具体的方針

ア 市町村教育委員会又は学校が自発的に行う教職員の研修に対して、教育センターの管理運営に支障がない限り、施設、

設備の利用、所員の指導助言等の援助を行う。

ただし、宿泊はできない。

- イ 学校等から研修に関して要請があった場合、教育センターの運営に支障のない限り指導助言を行う。

研究事業

(1) 基本的な考え方

ア 「豊かで、調和のとれた教育」の実現を目指すし、その基礎として必要な研究・調査を行う。

イ 研究にあたっては、教育現場との連携を密にしながら、教育指導の改善を核とした実践的な研究・調査を行う。

ウ 研究の成果については、研修との一体化、現場への元が十分に行われるようにする。

(2) 具体的方針

- ア 研究課題は、教科等の部門ごとに設定する。
イ 各課題ごとに4～5名の研究委員を委嘱して研究委員会を構成し、組織的・計画的に研究を進める。

また、小学校、中学校、高等学校の1～2校（1～2の課題）を研究協力校として定め実践性・客観性の保障される研究を進める。

ウ 全国並びに地区の教育研究所連盟等との研究交流を密にして、その深化と充実を図る。

また、全国教育研究所連盟の行う共同研究等にも参加するなどして、全国的視野に立った研究を進める。

エ 研究成果は、紀要としてまとめ教育改善の資料として学校及び関係機関等に提供するとともに、研修講座における指導資料とする。

オ 「現場から」の教育指導の改善と充実についての積極的な努力を期待して、「教育研究論文」を募集する。

昭和54年度研究教科等

小学校国語

中学校国語

小学校社会

中学校・高校社会

小学校算数

中学校数学

高校数学

中学校英語

高校英語

道徳教育

へき地教育

教育工学

特殊教育

教育相談・生徒指導

指導相談事業

(1) 基本的な考え方

教育センターが行う研修・研究事業の一環として、心身の障害や生活行動上問題をもつ児童生徒の教育指導・教育相談に関する事業を行う

(2) 具体的方針

ア 対象

幼児、児童、生徒並びに保護者・教師

イ 内容

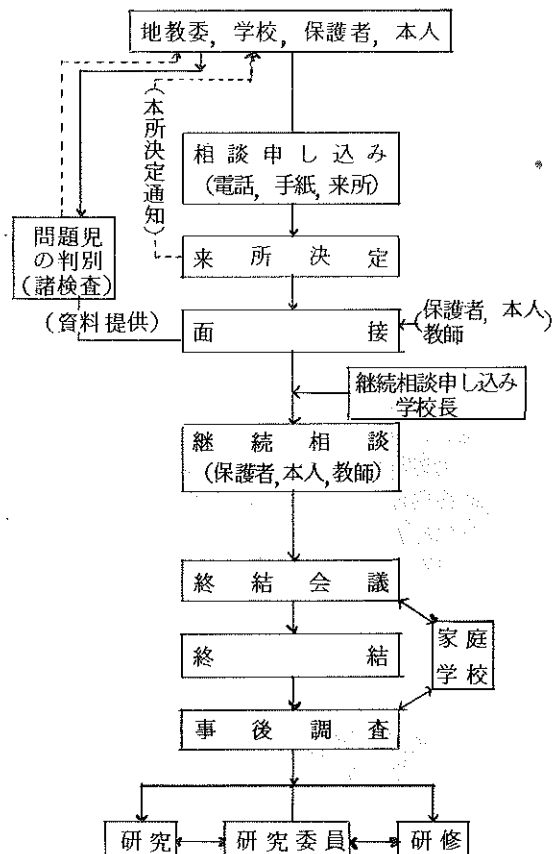
- 身体、神経に関すること
- 知能、学業に関すること
- 性格、行動に関すること
- 進路、適性に関すること
- その他指導・相談に関すること

ウ 相談日

原則として、月・水・金 9:30～16:00

エ 申込み・受付

- 電話、手紙、来所などにより申し込む。
- 来談決定者には、相談日および時間を通知する。



教育情報普及事業

(1) 基本的な考え方

教育に関する情報センターとしての機能をめざし、研修や調査研究に要する専門図書、研究紀要、その他教育に関する諸資料を収集するとともに、必要な情報を積極的に提供する。

(2) 具体的方針

ア 図書・資料の収集と活用

- 教育に関する専門図書、研究紀要、調査報告等を収集整理し、広く教育関係者の利用に供する。
- 教科書をはじめ、各種の教材、指導資料を収集し、学校における教育実践に寄与する。

- 教育に関する歴史的資料や郷土資料の収集につとめる。

イ 広報普及、

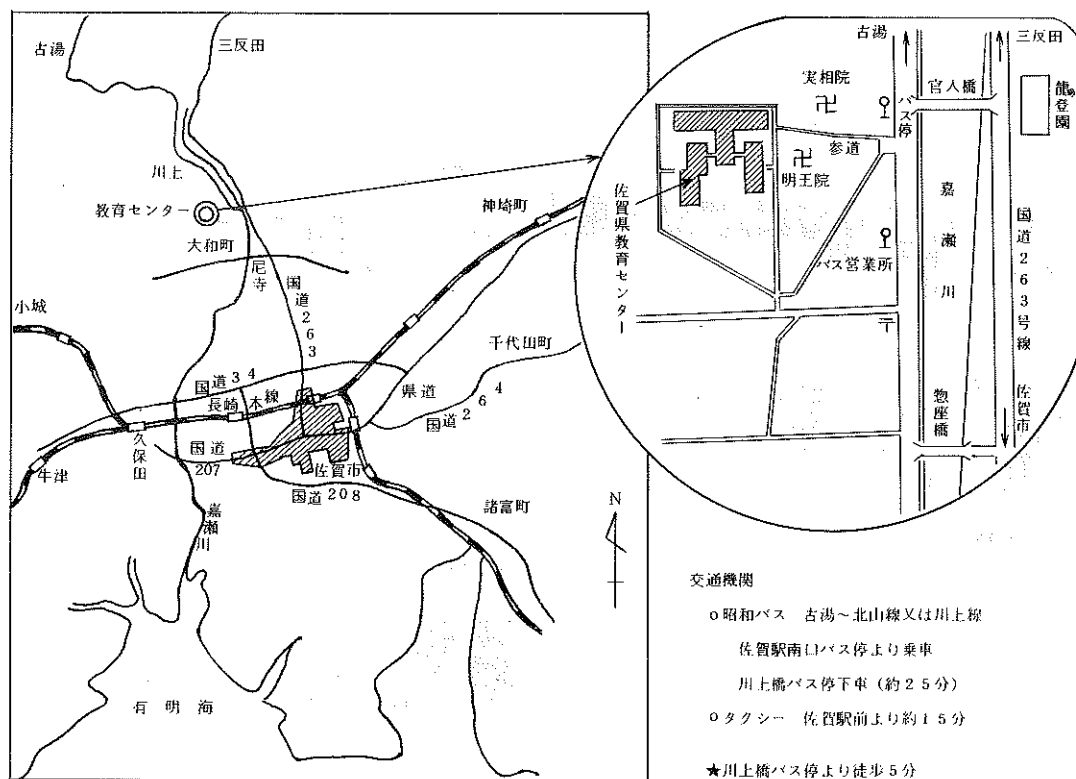
- 「所報」を発行し、教育センターでの研究や研修を紹介するとともに、教職員の研修に役立つ情報を提供する。
- 教育センターでの研究や研修の成果を集録して、教職員の研修に資する。

ウ 図書資料室の利用

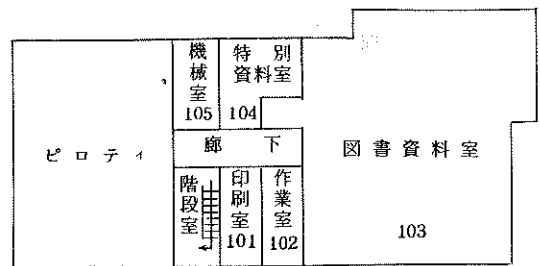
- 閲覧時間 平日 午前9時～午後5時
土曜日 午前9時～12時
ただし、日曜・祝日及び年末年始は休館
図書・資料の貸出は原則として行わない。

※ 蔵書数 図 書 約2,700冊
教育資料 約7,800点

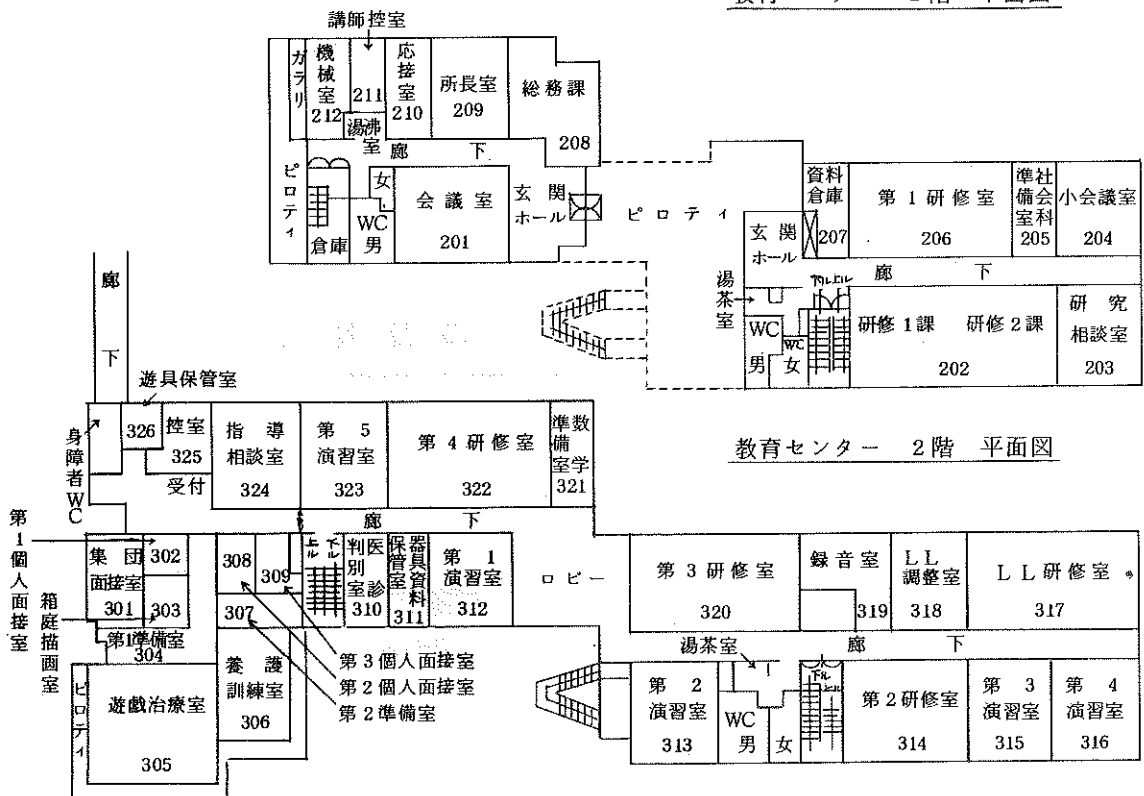
佐賀県教育センターの位置構造



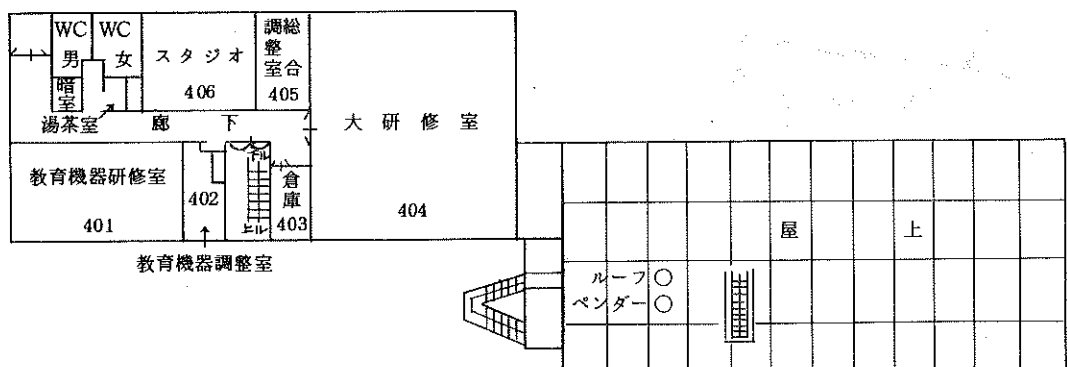
研修棟平面図



教育センター 1階 平面図



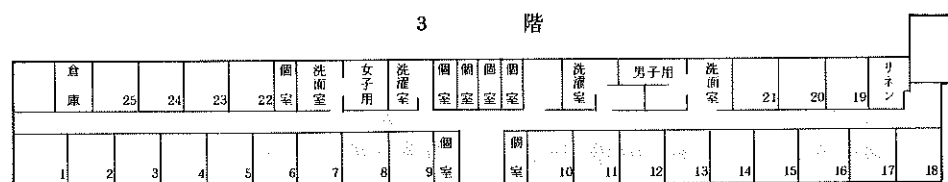
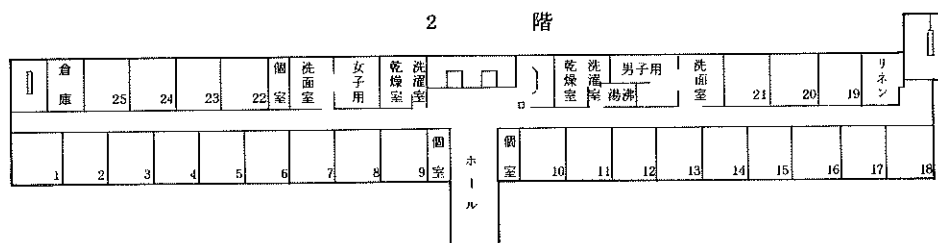
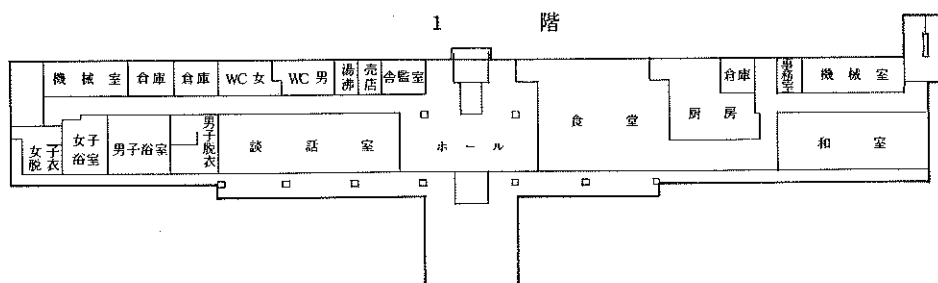
教育センター 2階 平面図



教育センター 3階 平面図

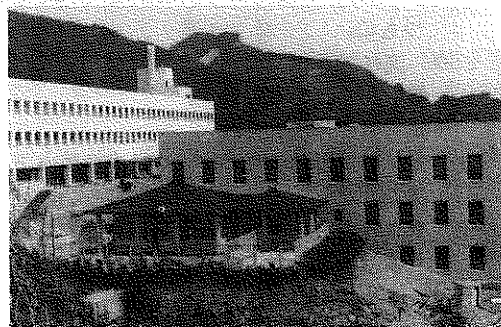
教育センター 4階 平面図

宿 泊 棟 平 面 図



宿泊室数等

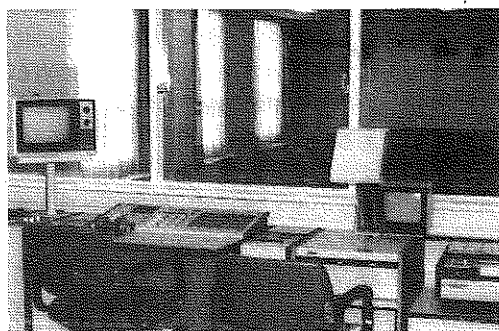
区分	階 別	2人部屋	個 室	計	
部 屋	2 階	25室	3 室	28室	
屋 数	3 階	25	7	32	
	計	50	10	60	
収 容 人 員	100人		10人	110人	
面 積	1 階	2 階	3 階	他	合 計
積	845.7㎡	864.0㎡	864.0㎡	55.8㎡	2,629.5㎡



宿泊棟

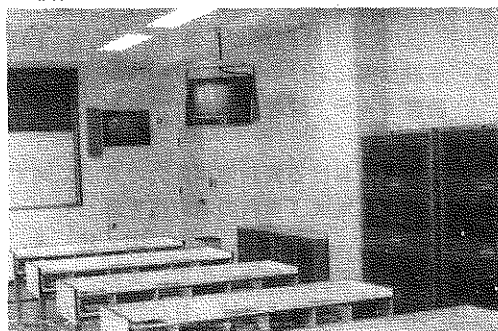
遊戯治療室

研修棟



LL調整室

研修室



教育機器研修室

昭和53年度研究紀要の紹介

英語多読の導入的指導について

松 永 徳 彦

1. 研究のねらい

語句の意味は分かっても、文全体で何を言おうとしているのか分かっていない生徒が多い。また文法をどんなに詳しく教えても、あるいは精読指導をどれほど手がけても、生徒の英文を読む力は期待するほどには伸びない。つまり英文法の知識は直ちに英語の学力とは言いがたいし、精読はそのまま多読に発展するとは限らないようである。生徒を多読に導くには、その見地に立った導入的指導が必要である。そのための一つの試みとして、英語読書会をとりあげた。以下要点のみを列挙する。

2. 多読の効用

- (1) grammar— translationからの脱皮。
- (2) 高原学習としての多読の効用。
- (3) 英語学習にとどまらず、広く読書力をつける。

3. 多読指導の基本的配慮

- (1) 読みの速さ……平均1分間50語を標準。
- (2) 語いの問題……高2で1,000語のレベル。
- (3) 多読教材の条件

ア 英語は易しいが、内容は知的年令にふさわしいもの。

イ storyの展開にforward urgeをもつもの。

ウ 文はなるべく短かく、対話があって、表現に動きがあるもの等。

4. 多読指導の方法と実践

- (1) 多読の指針の与え方……副読本の読み方7ヶ条を設定し、事前指導をおこなう。

- (2) 英語読書会の指導計画(全4時間)

ア 多読の導入指導(全体指導)……1時間

イ テキストの輪読(個別とグループ)……

2時間

ウ 読書発表会(グループ発表・討論)……

1時間

5. 多読指導における評価

読書カルテ、読書ノートによる形式的評価。

高校地理における資料活用能力の育成に関する
考察—郷土(地域)資料の教材化を通して—

白 川 武 人

本県において、昭和52年度に実施された「学習状況実態調査」によれば、社会科の学力は、小学校3年・5年生は全国水準を上まわっているが

中学校になると全国水準を下まわり、とくに、地理的分野における「資料の読みとり」が不得手であるという結果がでている。高校については、この種の調査はないが、中学校と同様ではなかろうか。

社会科の学習が、継続的・発展的に生かされるためには、基本的事項の理解や基本的能力を十分に身につけておくことが必要である。社会科における基本的能力の一つとして「さまざまな情報に対処し、諸資料を吟味し、公正に判断する能力」があげられる。地理教材として使用される資料は多分野にまたがり、ふつう、日本・世界の統計を図化したもので、その取扱いに不慣れな生徒にとっては、無味乾燥なものであろう。そのため、統計資料への関心は薄く、資料の読みとりをぬきにして、結論だけをみて事足りりとする結果となる。これに対処するために、生徒の生活と密着した郷土(地域)資料を教材化し、興味を呼びおこし、郷土との比較を通して具体的に指導する必要がある。

郷土資料を教材化する場合、高校地理の内容構成に応じて、どのような資料を、どのように図化又は表化するか、又、統計資料の表化・図化等の作業学習をどのように組入れるかの検討を進めなければならない。

また、資料の表題の理解・数値の単位の理解・資料の吟味など、統計資料の読みとりの手順を指導する必要がある。

以上のような意図から、郷土資料の収集、吟味・教材化の工夫を進めているものである。

<研究紀要第104号>

読みの指導における「理解」と「表現」との
有機的関連について

栗 山 繁 治

読み(理解)の学習の中に、そのねらいに合致した書く(表現)活動や働きを取り入れ、表現力を活用させて、読みをより深く、確かなものにしていくことができるのではないかという観点から、「理解」と「表現」の相補関係をみていこうとするものである。

とくに、文学的文章の読みと、説明的文章の読みの具体的授業の場を通して、関連の効果と指導法の問題に探りを入れてみることにした。

書くことが、子どもたちの思考に与える影響を捉え、関連指導のあり方が少しでも明らかにできればと意図している。

昭和53年度研究紀要の紹介

英語多読の導入的指導について

松永徳彦

1. 研究のねらい

語句の意味は分かっていても、文全体で何を言おうとしているのか分かっていない生徒が多い。また文法をどんなに詳しく教えても、あるいは精読指導をどれほど手がけても、生徒の英文を読む力は期待するほどには伸びない。つまり英文法の知識は直ちに英語の学力とは言いがたいし、精読はそのまま多読に発展するとは限らないようである。生徒を多読に導くには、その見地に立った導入的指導が必要である。そのための一つの試みとして、英語読書会をとりあげた。以下要点のみを列挙する。

2. 多読の効用

- (1) grammar—translationからの脱皮。
- (2) 高原学習としての多読の効用。
- (3) 英語学習にとどまらず、広く読書力をつける。

3. 多読指導の基本的配慮

- (1) 読みの速さ……平均1分間50語を標準。
- (2) 語いの問題……高2で1,000語のレベル。
- (3) 多読教材の条件
 - ア 英語は易しいが、内容は知的年令にふさわしいもの。
 - イ storyの展開にforward urgeをもつもの。
 - ウ 文はなるべく短かく、対話があって、表現に動きがあるもの等。

4. 多読指導の方法と実践

- (1) 多読の指針の与え方……副読本の読み方7ヶ条を設定し、事前指導をおこなう。
- (2) 英語読書会の指導計画(全4時間)
 - ア 多読の導入指導(全体指導)……1時間
 - イ テキストの輪読(個別とグループ)……2時間
 - ウ 読書発表会(グループ発表・討論)……1時間

5. 多読指導における評価

読書カルテ、読書ノートによる形式的評価。

高校地理における資料活用能力の育成に関する考察—郷土(地域)資料の教材化を通して—

白川武人

本県において、昭和52年度に実施された「学習状況実態調査」によれば、社会科の学力は、小学校3年・5年生は全国水準を上まわっているが

中学校になると全国水準を下まわり、とくに、地理的分野における「資料の読みとり」が不得手であるという結果がでている。高校については、この種の調査はないが、中学校と同様ではなからうか。

社会科の学習が、継続的・発展的に生かされるためには、基本的事項の理解や基本的能力を十分に身につけておくことが必要である。社会科における基本的能力の一つとして「さまざまな情報に対処し、諸資料を吟味し、公正に判断する能力」があげられる。地理教材として使用される資料は多分野にまたがり、ふつう、日本・世界の統計を図化したもので、その取扱いに不慣れな生徒にとっては、無味乾燥なものであろう。そのため、統計資料への関心は薄く、資料の読みとりをぬきにして、結論だけをみて事足りるとする結果となる。これに対処するために、生徒の生活と密着した郷土(地域)資料を教材化し、興味を呼びおこし、郷土との比較を通して具体的に指導する必要がある。

郷土資料を教材化する場合、高校地理の内容構成に応じて、どのような資料を、どのように図化又は表化するか、又、統計資料の表化・図化等の作業学習をどのように組入れるかの検討を進めなければならない。

また、資料の表題の理解・数値の単位の理解・資料の吟味など、統計資料の読みとりの手順を指導する必要がある。

以上のような意図から、郷土資料の収集、吟味・教材化の工夫を進めているものである。

<研究紀要第104号>

読みの指導における「理解」と「表現」との有機的関連について

栗山繁治

読み(理解)の学習の中に、そのねらいに合致した書く(表現)活動や働きを取り入れ、表現力を活用させて、読みをより深く、確かなものにしていくことができるのではないかとこの観点から、「理解」と「表現」の相補関係をみていこうとするものである。

とくに、文学的文章の読みと、説明的文章の読みの具体的授業の場を通して、関連の効果と指導法の問題に探りを入れてみることにした。

書くことが、子どもたちの思考に与える影響を捉え、関連指導のあり方が少しでも明らかにできればと意図している。

<研究紀要第105号>

読み深めるための発問に関する実践的研究
園田 勝

これまでの授業が結果主義に傾斜し、その結果に至る思考過程が軽視される傾向にあるという反省に立って、思考過程と大きくかわる発問の問題を取り上げた。まず、ふだんの授業の発問のもつ問題点を、授業録音等によって明らかにした。

次に、文学教材・説明的教材それぞれ、意図的発問の設定による授業を試み、発問のもつ問題点を追究した。この結果、次のことが言える。

教材研究等を徹底してやるなかで、発問を精選することが大事である。さらに、この発問を生徒の反応とのかかわりのなかで構造化することである。また、発問に使用される言葉は、発問が音声言語ゆえに、生徒の理解度を考慮し、漢語を避けできるだけ和語を使用することが思考をより促す。

<研究紀要第106号>

高校世界史指導事例集

山口一巳

教師たるもの、だれしも授業をなりわいとしていのであるから、授業をよくしようと思うものである。生徒の反応に注意したり、過去のテストの結果をふり返ったりしながら、今度は説明の仕方を変えてみようかと、あの資料をここで使ってみようかなど、あの手この手の思案に暮れるのである。そこから、教師自らの、史実の把握や歴史観が問い直され、勉強のやり直しということになったりする。

授業の方法の開発のためには、今日、多くの情報があるが、身近な存在である同僚の工夫が、案外知られていないのではなからうか。

この事例集は、県内の世界史の先生方から、資料プリント、OHPのTP、自作スライドの目録等を提供してもらって編集し、授業改善を考えるヒント集にしようというものである。

<研究紀要第107号>

算数科における認識のつまずきと思考の発達

松村 静二

ある命題Xがわかるということは、①解釈(なぜ、そうであるかについて説明ができる)、②具体化(例えば、こんなものがある)、③推論(たぶん、こうなるであろう)の三つが成立することである。

例えば、 $2+3=5$ が真にわかるということは①「なぜ」が右のような相互関係としてとらえられる。

② リンゴ2ここと3こで5こ、子ども2人と……
③ $3+4$ は①、②をステップとして、7になることが自力で考えられることである。

本研究では、算数科におけるこのような「わかる」のメカニズムに関して、子どもの論理(子どもらしい考え方、つまずき)を明らかにし、さら

にそれを正しい思考(教科の論理)にのせるにはどのような方略と技法が必要であるかを探求したものである。

<研究紀要第108号>

「一次関数」におけるつまずきの実態に関する一考察

井手 芳郎

今日問題になっている「落ちこぼれ」は、生徒のレディネスと授業とのへだたりが大きいことがその一つの大きな原因と考える。

そこで、生徒の前提学習に関しての思考過程のつまずきをとらえ、その形成関係を明確にすればフィードバックしてやれる内容の把握ができて、レディネスを伸ばしてやるのが容易になるものと思われる。

本年度は、第2学年で学習する「一次関数」についてのレディネス調査を行い、生徒のつまずきをとらえ、教材の構造や発展性の分析とを絡み合わせて、ひとつひとつの教材についての目標分析表を作成してみた。授業設計や評価やつまずき治療の資料として活用していただきたい。

<研究紀要第109号>

数学ⅡBに関する生徒の学力及び意識の調査

山口 圭一

昭和51年度の数学Ⅰに引続いたもので、普通高校五校の3年生約440名を対象に、数学ⅡBに関する学力テストとアンケート調査を実施した。

文系、理系の別のほか、2年時の数学ⅡBの五段階評定をもとにした段階別の細かい分析を行い生徒の一般的傾向、長所、弱点のほか、指導上の留意点についても検討を加えている。

アンケートでは、数学ⅡBを中心に、自宅学習授業、進路と数学など24の小項目ごとにその応答分析を行った。

このほか、教師へのアンケートや高校での数学教育に関する意見や反省もおり込んでおり、現場実践の参考資料として活用していただきたい。

<研究紀要第110号>

中学校英語における聴解訓練のための教材

畠山 孝郎

このたび、中学校学習指導要領が改訂され、外国語(英語)の目標は「外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養うとともに、言語に対する関心を深める。」となっています。

このことから、英語を聞いたり、話したりする力を伸ばしてやるのがこれからもっとも英語教育の前面にうちだされなければならないということになります。そこで、昭和52年度研究紀要第93号にひきつづき、今年度は、本県の中学の生徒が使用している教科書New Prince English CourseおよびNew Horizon English CourseのBookⅡの内容から

聴解訓練(復習用)として適当な教材を選び編集しました。

テープもついていますので、授業の過程で使用していただければ幸いです。

<研究紀要第111号>

高校英語の指導に関する調査

一高校入門期におけるつまづきの分析と 授業改造(その1)一

山下 一夫

高校入門期の指導はどの教科においても大切であるが、特に英語においては高校1年で「英語嫌い」になる率が一番高いことなども考え合わせると重要である。生徒の英語学習に対する意識についてはすでにある程度の調査がなされたので、(昭和52年度に佐賀県教育委員会が行った学習状況に関する実態調査B-2調査)本年度は英語担当の先生方が果たして英語教育に関して、どのような考えを持っておられるかを知るために、入門期指導、授業の進め方、動機づけ、評価、自己研修等について調査を行った。その結果、英語が嫌いになる理由一つを取り上げてみても、生徒が答えた理由と教師が思っている理由とは大きく「ずれ」のあることが明らかになった。

<研究紀要第112号>

佐賀県中学校精神薄弱特殊学級

教育課程編成のための手引

山田 国重

いま、「何を」、「いつ」、「どこで」、「どのように指導したらよいのか」は、特殊学級担任が当面する研究課題である。

昭和48年12月、文部省から、「精神薄弱特殊学級教育課程の手びき」が示されたが、現場の担当教師からは、更により具体的な各教科等指導内容の資料がほしいという要望にこたえて、文部省からの手引きを補足する意味でこの資料を作成した。

この資料が、ややもすれば教科重点主義に傾斜する現在の特殊学級の指導を、いま一度、彼らの特性や能力に即した指導内容、指導法など、社会自立をめざしたこの教育への検討資料としたい。

<研究紀要第113号>

学校教育相談の事例

服巻清之・相川文彦

井上鴉介・小山繁隆

児童・生徒の「登校拒否」・「自殺」などの非社会的問題行動や、「触法行為」・「不良行為」などの反社会的問題行動の増加が問題となっている。今日、教師も保護者も、日夜その指導に心を痛めているのが現状である。そこで今回は、研究論文調の固さを避け、学校現場(幼・小・中・高校)で、生徒指導に取り組んでいる教師の生の姿

をありのまま紹介し、上記のような事例の指導に少しでも役立つことを願って編集した。

内 容

- ・発達遅滞児が、教師の「子どもに学ぶという姿勢」によって、著しい情緒面の成長を遂げた事例
 - ・登校拒否児4事例：いずれも教師の受容と共感の態度や校内の共通理解により立ち直ったものの
 - ・研究所との連携で緘黙児が治った事例
 - ・遊戯療法により治った夜尿児の事例
 - ・学校カウンセラーと担任の連携プレイによる学習不適応児2例と不純異性交遊の生徒や女性下着窃盗の生徒などの指導事例
- 以上の各事例には、それぞれ簡単なコメントを付し、併せて、指導のための一般論も要約して紹介している。

<研究紀要第114号>

探求的学習シートの開発とその利用

泉 建一

授業では、よく学習シートが利用されている。学習シートは、次のような長所を持っている。(子どもの立場から)①一人一人が教材と直接対じすることになる。②書くことによって理解や思考が深まる。(教える立場から)①個別指導の場となる。②形成的評価のよい手法の一つである。このような学習シートについて、今一度その教育的価値を見直してみようというのが、この研究の契機である。まとめやドリルのためのシートではなく、「発見的に学ばせるための学習シート」という観点から、その内容や形式について考察した。また書くことと関連して、思考と言語、思考における映像的要素などについて理論研究をすすめた。研究は、その緒についた程度で、未だ浅いものであるが何らかの参考になれば幸いである。

<研究紀要第115号>

道徳的实践力を培う指導のあり方を求めて

一特に小学校道徳授業を中心として一

吉 木 靖 範

道徳の授業では、道徳的实践力を育成することを目ざしている。そのためには、導入の段階での安易な経験談の発表は避け、主資料にもっと時間をかけ、問題を焦点化し、主人公の心の動きにポイントをおいて発問し、自己の生活とからめて、価値の内面化をはかることが大切だと考える。つまり資料を利用して、判断や心情を態度にまで高めなくては…考え、実践例をもとに考察してみた。取りくんで一年目、今までの道徳性と道徳的实践力がどのようにかわっているのか、同じ意味に受けとめてもよいではないか。実践力を育成する他の効果的な方法はないものか。今後の問題として研究にとりくんでみたい。ご叱正を乞う。